

待兼山俳句会

第六百九十七回

世話人

山田安廣・上田恵子・鈴木輝子・根来眞知子
東中 乱・向井邦夫・森 茉衣

令和七年二月十七日(月)

会場 大阪倶楽部 会議室

締切 午後二時

出席者

瀬戸幹三・山戸暁子・上田恵子・小出堯子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・根来眞知子・東野太美子
向井邦夫・森 茉衣・山田安廣

投句者

碓井遊子・西條かな子・寺岡 翠・中嶋朱美・中村和江・西川盛雄・東中 乱・平井瑛三
以上出席者十一名+投句者八名 計十九名

兼題

春浅し・恋猫(幹三) 露の臺・猟名残(暁子) 当季雑詠 通じて八句

次回

例会 令和七年三月十七日(第三月曜日)会場 大阪倶楽部会議室 締切 午後二時
兼題 水草生ふ・春愁(幹三) たんぽぽ・春の川(暁子) その他当季雑詠

選者吟

傷負うて恋猫海を見てゐたる 幹三

細く戸を開けて二月を入れにけり

猟名残森のにほひの変はる頃

山を這ふ最後の銃声猟名残 暁子

猟名残とて肉塊を配らるる

露の臺大地の味を閉ぢ込めて

幹三 選

獵名残犬と語らひつつ下山

春浅し如何に友どち世にふるや

◎がんばれと思はぬでなし猫の恋

露の臺ぼつぼつ摘みて小半日

◎獵名残とて肉塊の配らるる

露の臺摘む喜びをお裾分け

二ヶ月の玻璃の内なる明るさに

恋猫に勝者敗者のあるらしく

花形に揚げられふきのたう軽し

句座なごむ紅白梅の八重咲けば

耳伏せて声の勇むや春の猫

◎あの頃はわからぬ味よ露の臺

母が娘に指さす土手の露の臺

露の臺味はひ初むる山の宿

◎はらわたを吐き出すばかり猫の恋

露味噌の旨さわからぬ青二歳

獵名残たふとき獲物分かち合ふ

あの銃声が最後なりしか獵名残

外出のままならぬ身よ浅き春

春浅し履き初めを待つ赤い靴

暁子

乱

眞知子

安廣

暁子

堯子

太美子

眞知子

太美子

兵十郎

兵十郎

恵子

盛雄

遊子

安廣

太美子

邦夫

太美子

翠

かな子

野を行けば杖の先にも露の臺

◎山の辺の道の曲がるや露の臺

恵方へと雲の流るる速さかな

◎春浅し手毬のごとく猫眠る

しばらくは旅に出ますと浮かれ猫

このあたり探すまで無く露の臺

◎獵果てて犬の眼も緩みけり

◎獵友の一人欠けたる獵名残

樹々の間に皮干す家や獵名残

金星の瞬き揺るる浅き春

草の乱起きし村道露の臺

朝帰りせし恋猫のいびきかな

瑛三

兵十郎

遊子

盛雄

輝子

輝子

堯子

恵子

兵十郎

太美子

和江

かな子

幹三 特選句講評

・がんばれと思はぬでなし猫の恋

眞知子

ある時は悲痛な、ある時は懇願するように、ある時は不当を訴えるように鳴く。うるさい中にふと憐憫の情が湧いた気持ち、分らないでもなし。

・ 獵名残とて肉塊の配らるる

暁子

狩獵としての成果であり、厳しい冬を乗り越えた人間の糧となるものであるが「肉塊」という言葉はいかにも生々しい。この獵期に命を失くしたもののへの憐れみを感じるのである。

・ あの頃はわからぬ味よ露の臺

恵子

読者それぞれに「あの頃」を思わせる。美しい壊れ物のような露の臺、その微妙な味が人それぞれに記憶を呼び起こさせる。

・ はらわたを吐き出すばかり猫の恋

安廣

十七文字で出せるインパクトとしてはかなり上位であろう。ここまで言い切った句はあまり見ない。あの小さな体からどうしてあんな声が出るのであろうか。

・ 山の辺の道の曲がるや露の臺

兵十郎

ゆっくりと山に沿って曲がる道に見つけた露の臺。句の一つ一つの言葉がそれぞれ春らしさを感じさせる。いいお日柄である。

・ 春浅し手毬のごとく猫眠る

盛雄

「春浅し」は、「早春」や「春寒し」と違ってやわらかく情緒的な言い方。そのニュアンスが「手毬」「猫」「眠る」とよく響き合っている。

・ 獵果てて犬の眼も緩みけり

堯子

寒い山中で獣を追い、命の危険もあつたであろう。ペット犬とは全然違う。そんな機能的な犬にも春が来た。穏やかな眼差しに戻ってほしいというのは作者の希望かも知れないけれど。

・ 獵友の一人欠けたる獵名残

恵子

この獵期に起きた不慮の事故であろうか。春が来てその友のことを語らいながら、酒を酌み交すのかも知れない。獵の仲間つながりを想像する一句。

暁子 選

あの頃はわからぬ味よ露の臺

恵子

露の臺ぼつぼつ摘みて小半日

安廣

花形に揚げられふきのたう輕し

太美子

獵名残森のほひの変はる頃

幹三

◎畏注意文字のかすれや獵名残

兵十郎

二ヶ月の玻璃の内なる明るさに

太美子

◎香の残る手で料理する露の臺

眞知子

朝帰りしよぼと恋猫裏口へ

和江

分け入って熊野古道の獵名残

盛雄

金星の瞬き揺るる浅き春

太美子

句座なごむ紅白梅の八重咲けば

兵十郎

傷負うて恋猫海を見てゐたる

幹三

浅春の大路陥没闇無残

瑛三

田舎宿料理教はる露の臺

恵子

恋猫よ一途なそなたうらやみぬ

眞知子

恋猫が窓辺に論文抄らす

かな子

◎尖るのを終へし木の芽の丸くなる

幹三

◎獵果てて犬の眼も緩みけり

堯子

わが庭でいういう仮寝恋の猫

太美子

朝帰りせし恋猫のいびきかな

かな子

◎樹々の間に皮干す家や獵名残

兵十郎

獵名残嵐が丘の鹿シチュー

乱

色淡きちひる絵本に兆す春

和江

あの銃声が最後なりしか獵名残

太美子

しばらくは旅に出ますと浮かれ猫

輝子

暁子 特選句講評

・ 畏注意文字のかすれや獵名残

兵十郎

獵期は十一月十五日から翌年二月十五日まで（北海道は十月一日から一月三十一日まで）である。獵は主に銃を使ってするが、畏も仕掛けてあるのだろう。獵期最後の頃になると「注意」の文字も消えかかっている。獵の危険性のようなものを感じる。

・香の残る手で料理する露の臺

眞知子

野山から採ってきてすぐに露味噌や天麩羅に料理する
山家の台所が目には浮かぶ。

・尖るのを終へし木の芽の丸くなる

幹三

季節の移り変わりを日々見つめる観察の眼。最初は鋭
角の芽が多いが季節が進むにつれて膨らんでくる。「尖る
のを終へし」が面白い。

・猟果てて犬の眼も緩みけり

堯子

十二月の季題の「狩」の傍題に「狩犬」がある。「猟果
てて」が猟期ではなく、一度の猟が終わったと理解され
ると、この句はむしろそちらの方に入るかもしれない。

「猟期果て」ならば猟名残だろう。人も犬も猟期の間は
鋭い目つきになるが、終ると普段の優しい目に戻る。

・樹々の間に皮干す家や猟名残

兵十郎

珍しい景を捉えられた。猟期の終わりごろになると、
それまでに仕留めた獣の皮が猟師さんの家の庭に干され
ているのだろう。

* 今回の「猟名残」という殆どの人には縁遠い兼題に
皆様、困惑されたことでしょう。けれど講釈師ではあり
ませんが待兼の俳人さんたちも結構いかにも「見てきた
ような」いい句を作られました。想像を逞しくして成り
ますすのも楽しいものです。とはいってもその歳時記にあ
る現代生活とはかけはなれた事物の季題には手を焼きま
す。その季題の本質をよく調べた上で、想像を逞しくし
て成り切ったり、食べたり使ったりしたことがあるかの
ように句を作り続け、次の世代に送るのは我々の使命か
と思いますが、やはり想像で作るのは後ろめたい気持ち
があります。

互選三句

朱美 選

春浅し手毬のごとく猫眠る

盛雄

浅き春我に自由な翼欲し

翠

尖るのを終へし木の芽の丸くなる

幹三

私たち人間もそうなりたいですね。

瑛三 選

今宵また深傷に懲りずうかれ猫

乱

猟名残犬が先駆けする家路

安廣

美容師の鈇軽やか浅き春

輝子

心地よい早春の一コマ。男女ともに理容は気持がよい。

和江 選

花形に揚げられふきのたう軽し

太美子

わが庭でいいう仮寝恋の猫

太美子

猟名残森のにほひの変はる頃

幹三

猟期の終わりは芽吹の香へと。

かな子 選

恋猫の性懲りもなく負けてきし

輝子

恋猫の垣を擦り抜け塀を越ゆ

邦夫

さう言へば恋猫ゐないニユータウン

翠

恋猫うるさく論文抄らず水をぶっかけたことを思い出す。

邦夫 選

露の臺大地の味を閉ぢ込めて

暁子

塀の上七色変化猫の恋

恵子

猟名残とて肉塊の配らるる

暁子

皆で肉塊を頂くことによって獲物の霊も浮かばれる。

恵子 選

猟名残森のにほひの変はる頃

幹三

はらわたを吐き出すばかり恋の猫

安廣

恋猫の帰還首尾など聞かずとも

輝子

帰ってきた時の様子で結果が分かる。本当にそうですね。

堯子 選

熊たちの森鎮もるや猟名残

翠

猟名残森のにほひの変はる頃

幹三

高きに吠え低きに唸り猫の恋

幹三

真夜中に聞こえる恋猫の叫び声をうまく表現された。

太美子 選

春浅し手毬のごとく猫眠る

盛雄

猟名残森のにほひの変はる頃

幹三

春浅し履き初めを待つ赤い靴

かな子

「暖かくなったら」と外出を待つ母子。「赤」の効果。

輝子 選

猟名残森のにほひの変はる頃

幹三

露の臺見つけ幸せ何となく

堯子

露の臺摘む喜びをお裾分け

堯子

露の臺は食べるより、見つけて摘むことが楽しいのだ。

兵十郎 選

香の残る手で料理する露の臺

眞知子

餌よりも恋よと駆けるうかれ猫

眞知子

色淡きちひろ絵本に兆す春

和江

ちひろの絵本は淡い色で、本当に春を呼ぶ感じがする。

茉衣 選

猟名残生命を奪ひ村守る

邦夫

春浅し手押し車の園児たち

安廣

猟名残犬と語らひつつ下山

暁子

猟の成果を共有した犬と苦勞と喜びを分かち合う様子。

眞知子 選

美容師の缺軽やか浅き春

輝子

細く戸を開けて二月を入れにけり

幹三

猟名残森のほひの変はる頃

幹三

森の匂いっていつでもどう変わるんだろう、不思議。

翠 選

猟名残とて肉塊の配らるる

暁子

しづかなるせせらぎの音や春浅し

邦夫

朝帰りしよぼと恋猫裏口へ

和江

いくら飼い主がもてないからと言っておまえまでも。

盛雄 選

石走る雪解の水や水車繰る

遊子

高きに吠え低きに唸り猫の恋

幹三

山の辺の道の曲がるや露の臺

兵十郎

山の辺の道を舞台に露の臺をハイライトさせた佳句。

安廣 選

須臾に過ぐ日々ゆえ愛し浅き春

眞知子

傷負うて恋猫海を見てゐたる

幹三

美容師の缺軽やか浅き春

輝子

爽やかな缺の音。早春に弾む心が透明感をもつて迫る。

遊子 選

水温むたゆたふ影の柔らかき

安廣

細く戸を開けて二月を入れにけり

幹三

猟名残とて肉塊の配らるる

暁子

公平に分配される獲物の分け前か又は保存用かと…。

乱 選

野を行けば杖の先にも露の臺

瑛三

灰色の空と教会クロツカス

茉衣

露の臺見つけ幸せ何となく

堯子

なじかは知らねど幸せにしてくれる露の臺。

参加者自選句

恋猫は恥ぢらひもなく声高し	朱美
スイスでも同じ仕様や猫の恋	瑛三
色淡きちひろ絵本に兆す春	和江
恋猫が窓辺に論文抄どらず	かな子
涸るる地に吹き出しにけり露の臺	邦夫
あの頃はわからぬ味よ露の臺	恵子
露の臺見つけ幸せ何となく	堯子
わが庭でいう假寝恋の猫	太美子
美容師の鈿軽やか浅き春	輝子
樹々の間に皮干す家や獵名残	兵十郎
恋猫や馴染ある声向ひの子	茉衣
がんばれと思はぬでなし猫の恋	眞知子
外出のままならぬ身よ浅き春	翠
石庭の蔭に角出す氷柱かな	盛雄
はらわたを吐き出すばかり恋の猫	安廣
雑踏の中老ひし身の西行忌	遊子
露の臺花芽ふふめば天ぷらに	乱

ひふいふ

山田安廣

寒い日が続きますね。合同句集は初校の校正も概ね終わって、ほぼ最終の原稿が出来る所までこぎつけました。改めて皆様方のご協力に御礼を申し上げます。配布は三月下旬か四月上旬になると思います。

暁子さんのお話。

兼題には今回の獵名残のように日頃経験した事の無いようなものに出くわす事がある。句作はなかなか難しいが、それになり切る(この場合は自分が獵師になり切る)事で対応したい。ただ、このような形ででも季語を残して行かないと古い季語を使った名句が消えてしまうので、皆さん頑張りましょう。